



沈んだ夜にぼくはひとり、ごはんが突然食べたくなかった。

昼ごはん、夜ごはんといった漠然としたごはんではなく、お米が食べたくなかったのだった。

ぼくは薄手のジャンパーをはおり、コンビニへと出かけて行った。

ぴいんぽおん

と、いつもとは違う音がした。

見慣れない男の店員さんが、レジのところに立っていて、どこかの旅館の女将のように、手を前に合わせ、ぴしっと立っていた。

ぼくはおにぎり売り場に直行した。

おにぎり売り場は、レジの目の前にある。当然、ぼくは、先ほどの女将店員に、じっと見られることとなる。

視線を感じるが、ぼくはおにぎり選びに集中する。

「たらこにしようか、それとも明太子にしようか……」これはぼくの心の声だ。

すると、ガン無視してきた左側から、「おいしいですよ」と声がかかった。

ぼくはしかたなしに、愛想笑いを返す。

「あ、そうなんですね」

「はい。はがまで炊いてますから」そう言って、女将店員は、お辞儀をした。

「へー、めずらしいですね」

このコンビニは、いつも来ているが、そんなに特別おいしいと感じたことはなかった。

なので、適当に合わせる。

ぼくは結局、たらこを手に取り、レジに出した。

「ご一緒に、あたたかいお茶はいかがですか」と店員は透き通る声で言った。

その声がものすごく透き通っていたので、ぼくは、「あ、じゃあ、それも」と言った。

「おにぎりって～ん、おちゃって～ん」

こんな掛け声だったかなあと思いながら、ぼくは千円札を取り出した。

「こちら、おにぎりとお茶をお買い上げのお客様に、シャボン玉をプレゼントしております」え、めずらしいな。そしてなんの脈絡もなく、シャボン玉なんだ。とぼくは思った。きっと、在庫が余っているのだろう。

「ありがとうございます」

ぼくは店を出た。

少し寒かったが、シャボン玉も試したかったので、ぼくは公園に行った。ブランコにはだれも乗っていなかった。いつもは子どもが取り合っているのに。と思いながら、ぼくは高い方のブランコに座る。

ペリペリとフィルムを剥がして、のりを巻く段で、ぼくは「ん？」と思った。

外灯の明かりだけで確かではないのだが、なにやらおこげのようなものが見える。

「まじで、はがまで炊いたんだ……」

のりを巻き終え、ぼくはたまらずおにぎりをほおぼる。

たらこがごはんと共に口の中に広がる。

「うまい」

なんだろうこの食感だけでもわかるつやつや感は。

こんなにここのおにぎりはおいしかっただろうか。

一気に食べ終えてから、ぼくはお茶をすすった。

は一と息をすると、もう白い息だった。

「うまかったなー」

その余韻にひたりながら、ぼくはシャボン玉をした。

外灯に照らされるシャボン玉はとても綺麗だ。

闇の向こうにシャボン玉は吸い込まれていく。

るるるるるーる

るるるるるーる

と、どこかで歌声が聞こえる。なんとなくさっきの店員の透き通った声のような気がする。

バイトの時間が終わったのだろうか。

名札を見ておけばよかった、と思った瞬間、どうでもいいやと思った。

ぼくは特別大きなシャボン玉を作り、白い息では一と夜空におしやった。

ちょっとさっきのたらこの香りがした。

## 【2017-10-16】指さし小説 第19話

<http://p.booklog.jp/book/117931>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

今回のテーマは、「歯釜」でした。「羽釜」じゃないんだなーと思いながら、書いてました。歯車とかと同じ種類の歯なのかなぁと勝手に思いました。そして、今、深夜ですけども、とてもお腹がすいています。でも外はもう極寒だと思うので、コンビニにはいきません。

歯があるおかげで、かまどの中にそれ以上沈まないってことで、「それ以上沈まない」もテーマにした小説でした。ってここで説明するとむなしくなりますが。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117931>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト